

世界遺産・富士山の今

青木 直子（認定NPO法人 富士山クラブ）

1. 保全状況報告書の提出

富士山が世界文化遺産登録された第37回世界遺産委員会（2013年6月）で、2016年2月までに保全状況報告書（State of Conservation report）をユネスコに提出することが課された。今年1月末、その報告書が提出された。富士山が世界文化遺産にふさわしいかどうか審査したイコモスから出された勧告＝宿題に対し、山梨、静岡両県がまとめたものだ。

富士山そのものだけでなく、湖、滝、火山洞窟などの自然、そして神社や御師住宅などの文化財を含め、登録名「富士山－信仰の対象と芸術の源泉」（Fujisan, sacred place and source of artistic inspiration）が表しているように、保全すべき場所は、富士山の神聖かつ美しい景観として25の構成資産とその周辺地域に及ぶ。山（Mountain）ではなく、地域（Place）として、それらすべてが一体性をもった文化的景観を保全せよと勧告を受けたのである。

具体的に挙げられたのは以下の項目である。

- ・世界遺産としての全体構想（ヴィジョン）
- ・来訪者戦略
- ・登山道の保全手法
- ・情報提供戦略
- ・危機管理戦略
- ・管理計画の改定

報告書は日本語でA4ファイル5センチほど、英文では640ページに及ぶ。日本のお役所が世界のお役所である国連機関＝ユネスコに提出したものは、一般市民にとっては何とも概要をつかみにくい。もともとイコモスからの勧告は文化的景観としての視点での指摘なので、文章表現が難しくわかりにくくもある。世界遺産センターを両県に設置し、「25の構成資産が一体性を持っているという情報を伝える」という例なら理解しやすい。一方、登山者が多いことに対して、この状態だと富士山の神聖さと美しさが損なわれているという指摘があった。神聖さと美しさをどう感じるか、人それぞれである。必ずしも適正な人数という数値目標を出せということではない。しかしながらどう示すかは数値を指標とするのが妥当だろう。結局のところ、2年後の2018年夏までに、富士山の1日あたりの望ましい登山者数を設定するとして、先送りにした課題もある。また、具体的に施策を実施していく上で、利用者負担として、「富士山保全協力金」の徴収も続けられるが、両県知事も「強制にはしない」と話している。現実では、4ルート併せて5合目以上の登山者うち、平均して50パーセントしか払っていない状況だ。

先の2月23日（富士山の日）に、当クラブ主催で富士山の日フォーラムを開催、保全

状況報告書の提出に伴う課題について議論したが、その中で「富士山保全協力金」について強制にすべきだという意見が多くだされた。地元では、強制にすると富士山に来なくなるのでは＝経済的な打撃を受けるのではと危惧しているという声もあるが、訪れる側にとっては、利用者として払うものは払うので、登山者の安全や環境保全にきちんと役立ててほしいと思っている。登山者への対策についても、2020年のオリンピックも見据え、外国人観光客・登山客への対応、火山噴火への対応など課題がいくつも残っている。県の担当者の話では、現状を把握するには、この2年では十分ではなく、まだまだ詳細な調査が必要で、莫大な時間とお金をかけなければならないと半分言い訳、半分泣き言のような発言があった。

ちなみに余談になるが、保全状況報告書の提出は、富士山に限ったものではない。富士山がお手本としている世界遺産に、ニュージーランド北島にあるトンガリロ国立公園がある。1990年に自然遺産、93年に文化遺産として登録されている。2003年までの10年間に5回ほど保全状況報告書を提出している。アメリカのイエローストーン国立公園は、鉱山開発で環境破壊が起きたとして一度は危機遺産となったが、24年間の間に17回の保全状況報告書を提出している。文化遺産登録が取り消されたドイツのドレスデンエルベ渓谷に至っては、取り消しまでの間に6回提出している。富士山は再提出させられるかもしれない、不完全であれば登録取り消されるかもしれないとマスコミなどで報道されているが、そう悲観的に考えなくてもよいかもしれない。日本のユネスコへの拠出金は、アメリカが支払いを停止しているため、日本が37億円と実質1位である。このたびのフォーラムにおいても、内容を見る限り、今回の保全状況報告書は落第とは言わないまでも、まだまだ満足すべき出来ではないというのが富士山の日フォーラム参加者が感じたことであるが、富士山が世界基準で保全されることを目指して、ユネスコやその諮問機関であるイコモスの審査や評価、さらには助言を受けていくことはむしろ歓迎すべきことである。企業が事業監査するように、イコモスにコンサルティングをしてもらい、富士山がその神聖さ美しさだけでなく、保全についても誇れるような手法や制度を整えていければよいのではと思う。ユネスコやイコモスの言いなりではなく、期待を超える成果を出すくらいの心意気がほしい。

世界をみれば、世界遺産になったことによって、観光客が押し寄せ、ごみの問題をはじめ、その地域コミュニティでさまざまな問題が起きている場所も多い。世界遺産登録前から、富士山は山麓に約63万人が住み、観光客4000万人が訪れている場所である。あまりに楽観的見方かもしれないが、日本が“この状態の”富士山で、保全モデルを確立できれば、他の世界遺産があるコミュニティでもその手法や制度が応用できるかもしれない。事実、ユネスコのサイトをみれば、世界遺産を持つ地域や国が集まり、事例研究や共同研修が行われているのが紹介されている。

富士山のごみ問題は、日本だけでなく世界でも報じられている。当クラブも設立当初から富士山のごみ問題とトイレ問題に取り組んでおり、徐々に成果をあげてきている。また

それらを日本国内の市民団体とだけでなく、アジアや太平洋地域の NGO と共有し、実践例として紹介している。富士山は準備できていないのに世界遺産になってしまったと言われるが、管理が一元化されておらず、さまざまな利害関係が絡み合う富士山地域において、今後数年にわたって要求されるであろう保全状況報告書の提出は、むしろ合意形成に役立つと考える。国や地方自治体は、もっともっと市民に投げかけ、意見をくみあげ、知恵を借りるべきである。一見、面倒で時間がかかりまともにならないように思えても、決められた後で、従えといわれるより、より多くのステークホルダーが関われば関わるほど最後には一つによりなっていくことは協働による実践でわかっている。

まずは、フォーラムでも要望が寄せられたが、イコモスの勧告の中にもあった「情報提供戦略」として、一般市民にもわかりやすく報告の内容を伝えることを求めたい。お役所バージョンでなく、市民バージョンで伝える努力をしてほしい。手伝ってもかまわないほどだ。

2. されど富士山の登山者数の考察

富士山の登山者数は、夏の7、8月の2か月間の数字を過去の統計と比べると、今年は20万人と十年前の数字とほぼ同じになった。人数減少の理由は、天候が悪かった、日本各地の噴火により富士山も噴火するのではと危惧した人が多かったのではといわれている。とはいうものの、登山者は週末に集中することが多く、土日は1日7千人から8千人が登り、混雑ぶりは変わらない。安全で安心な登山という視点では、登山道の混雑を緩和することに加えて、噴火や落石の危険にどう対処するか喫緊の課題である。前述したように、2年後までに適正登山者数を設定としているが、数だけでは解決できない。弾丸登山の禁止、ご来光は頂上でという意識を変える、頂上を目指す登山でないトレッキングの提案、ルートの整備など、検討すべきことはたくさんある。



山頂を埋め尽くす登山者

神聖さと美しさを感じることができるか？
噴火の危険性を認識しているだろうか？

3. 活動実践例

世界遺産として、富士山の山だけでなく、いわば富士山に見える地域、美しい富士山の景観を保全するべく地域全体を保全していく取り組みの一つとして、国、山梨、静岡両県、

山麓を囲む 11 市町村およびその地域の住民が一つになって、富士山をぐるりと囲む 3 つの国道とその周辺地域のごみを拾う「ぐるり富士山風景街道一周清掃」が昨年 10 月に実施された。1998 年に設立以来、約 17 年にわたって富士山のごみ問題に取り組んできた富士山クラブとして、地域コミュニティに呼びかけ、国、地方自治体、企業、民間団体が集まり実行委員会を結成、道路沿い、構成資産の周りと前後の月を含む約 1 か月間、地域のあちこちで清掃活動が行われた。

当クラブが行う富士山の清掃活動は、山梨、静岡両県で年間 80 回前後、首都圏を中心に全国から 5 千人を超えるボランティアが参集する。毎月行っている定例清掃には、熱烈な地元会員たちが毎回参加する一方で、地域の住民が気軽に参加してくれるという状況ではなかった。始めたころは、実際に不法投棄がひどい現実としてあったとしても、「富士山が汚いとあえて言うな」と批判されたり、県外からみれば富士山清掃であっても、地域にとっては町内清掃。「お金払ってわざわざごみ拾い？」とよく言われた。都市に住んでいればいるほど環境に負荷をかける生活になってしまうので、自然を大切に、環境を守ろうと強く感じる。地元では大きく美しい富士山がいつでもそこにある。環境はもともといいのである。

「環境保全」がピンとこないなら、それに代わる言葉はないか。世界遺産になったことで、程度の差はあるにしても地域として関わらざるを得なくなってきたという状況も出てきた。そこで国交省が音頭をとる「日本風景街道」の一つ、「ぐるり富士山風景街道」のネットワークを活用できないかと考えた。山梨・静岡両県の行政、企業、市民団体がメンバーとなっており、富士山クラブもかなり前からメンバーの一員であったが、それまでは県ごとに動いており、両県一緒にという機運が高まっていなかった。世界遺産登録されたことが、富士山で一つにまとまる何かをしようと呼びかけるきっかけになり、「環境保全」を前面に出すより、「地域コミュニティの再生・活性化・発展」という言葉のほうが地元では受け入れられた。視点を変え、アプローチの方法を変え、富士山全域で一つになっての清掃活動の第一歩の取り組みが動き始めたのである。10 月 24 日には 12 か所で 1500 人が一斉に清掃活動を実施、それ以外の日でも、市民グループ、学校、企業などが富士山をぐるりと囲む地域で「清掃活動を実施した。行政も道路、都市整備と国交省と連携する部署だけでなく、環境省そして県レベルでは世界遺産、富士山保全といった部署からも参加があった。

世界遺産となった今、オール富士山で、両県全域の地域住民があらためて富士山に関心を持ち、地域で行動することで、まだまだ規模は小さいけれど、富士山保全の大きなステップとなった。宿題そして課題解決のために実行していくこと、まだまだ困難がことにつかることもあるだろうが、だんだんと「本気」みせようよという輪が広がりつつある手ごたえを感じている。

以上